

そばに置きたい



便利で素朴 竹メテボ



森新緑さん作のメテボ 税込み1万800円。直径27㍍、高さ26.5㍍。家の中で物入れとして使える。問い合わせはシルタ合同会社(0946・25・1270)。 外山亮一撮影

メテボ、と言っても分からない方が多いかもしれせん。テボは九州地方でかごを指します。側面に大きく目(メ)が開いているからメテボと呼ばれます。

本来は、里芋を洗うための道具です。泥のついた里芋を入れて川に沈めておくと、水流で泥が取れるんです。裾が広がり、口がすぼまった形をしているのは、川底に置くことができ、芋が外に出ないようにする工夫です。

大分県日田市の竹細工師、森新緑しんりくさんが作っています。新緑さんのおじいさんが同県の別府で竹細工を学び、日田に移って仕事を始めました。温泉地の別府は江戸時代から湯治客向けに竹細工が盛んでした。

私が新緑さんと出会ったの

は38年前。ナバテボというキノコを運ぶかごに魅了され、産地を探し回った末に新緑さんの工房にたどり着いたのが最初です。

その後、独特の形や編み目が生み出す陰影が美しいメテボを、現代の道具に改良できないかと考えました。底に脚を付け、材料の竹ひごをきれいに磨き、縁をしっかり巻くことを提案したところ、新緑さんが応えてくれました。

雑誌や新聞、スリッパ、野菜など、いろんなものを入れるのに使えます。側面の目から中身が見えて便利。素朴な竹細工は部屋の空気を和らげます。新緑さんは体力の衰えもあり一時仕事を離れましたが、再び取り組んでいます。

(手仕事フォーラム代表)

久野恵一